

## 論文の要旨

論文題目 題目： 修身教育の形成と近代的エートス  
— 寓話・童話・昔話における〈子ども〉の役割—  
氏名 坂本 麻裕子  
学位 博士（文学）  
授与年月日 平成 24 年 7 月 31 日

本論文の目的は、明治期日本のイデオロギー研究の視座から〈小学校〉の国定教科書以前（明治初年～明治 36 年）の修身教科書における寓話・童話・昔話のテキストに焦点を当て、エートス分析を行い、修身教育の形成と近代的エートスの連関を解明することである。特に〈小学校〉をめぐるエートスに照準を定め、明治政府が推奨した〈子どもの模範像〉の考察から、明治期日本の「近代化」の一側面を明らかにするため、国民教育における二つのイデオロギー的二項対立を基軸に分析を行った。一つは〈立身出世〉—〈孝〉の二項性で、これは近代的エートスの中でも国家及び民衆の〈労働〉の道徳的規範を方向付けたと考えられる。二つ目は〈虚構〉—〈実話〉の二項性で、修身教科書のテキストを特徴づけるイデオロギーの発現形態として、本質的な意味を持つと思われる。具体的には「口承文芸」が道徳的規範を反照してイデオロギー化する側面に注目し、修身教育素材として利用されたイソップ寓話、グリム童話、日本昔話を〈虚構〉の側に位置付けた。これに対する〈実話〉としては〈子どもの模範像〉を体現した「二宮金次郎」や「塩原多助」を取り上げた。エートス分析の手法は、西洋での資本主義の原動力となったエートスを道徳的規範から読み解いたマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』におけるエートス分析を一範例とし、テキストから修身教育イデオロギー的なキーセンテンスを抽出する手法を取った。

第一章では、修身教育制度の成立と展開に焦点を絞り、マクロの視点から明治政府が進めようとした「近代化」の背景にあるエートスについて考察を行った。特に、こうした時代的背景が子どもの役割にどのような影響を与えたのかという点を明らかにするため、〈家〉と〈労働〉のエートスに焦点を当てた。明治期日本の近代化は急激な「速さ」を特徴とし、多くの変革が国内の内的な成熟を待たずに明治政府主導即ち「上」からの力で進められた。この「速さ」は明治期の非常に早い段階で近代的〈学校〉を設置する契機となり、“資本主義経済体制への移行”と“国民教育の場である〈小学校〉の設置”を同時に進行させた。こうした新しい体制を支え、民衆をまとめるエートスを政府が必要としたのは必然の流れであった。天皇を日本国民の先祖とする家族国家論に繋がるエートス〈家〉が、明治 23（1890）年の「教育勅語」へ収斂していったことは周知の事実である。しかし、この過程は単純なものではなく、明治政府は内部に〈洋学〉

と〈王政復古〉という自己矛盾を持っていたことが明らかになった。この自己矛盾は国民教育の基軸となる修身教育イデオロギーの形成にも影響を与え、「学制序文（被仰出書）」のエートス〈立身出世〉と「教学聖旨」のエートス〈孝〉の相克という形で浮かび上がっている。さらに明治14年の政変を契機に〈立身出世〉の手段から〈学問〉が排除され、その結果〈立身出世〉は下野して民衆の自発的エートスとして浸透を加速させたと考えられる。一方で、初代文部大臣森有礼が整備した〈富国強兵〉のための国民教育方針は〈労働〉を修身教育イデオロギーとして取り込み、〈孝〉を軸とすることで階級固定的な勤労の鼓舞へと本質を変えていったことも分かった。つまり、家族国家論に繋がる心情的な〈家〉を維持する動力として、現実的且つ経済的な問題と直結するエートス〈労働〉が必要だったと考えられる。第二章以下では、このエートスが国民教育の場となる〈小学校〉の修身教科書テキストに反照していることを示した。

第二章は、国定修身教科書にも採用されたイソップ寓話を考察した。修身教育素材としてのイソップ寓話の原典は、明治初期に管内小学教則に挙げられた『通俗伊蘇普物語』（渡部温、明治6年）であることがわかっている。この中で、渡部温は「蟻ときりぎりす」をイギリスの経済に関する小学校教科書『経済説略』と結びつけており、蟻の労働は賃金の貯蓄を促す西洋近代的な労働者の〈労働〉エートスによって道徳的に解釈されていたことが明らかになった。従って、修身教育の形成の初期は、イソップ寓話は西洋の資本主義近代国家における〈労働〉とともに解釈され受容されていたことが示された。明治30年代になると蟻の〈労働〉は二宮金次郎との連結が明確に提示される形で登場し、家業や農作業を手伝いながら〈学校〉で勉強する子どもの〈労働〉へと読み替えられ変容していく。また「兎と亀」も〈学校〉での勉強を推奨する形で取り込まれており、イソップ寓話は二宮の〈労働〉を強化する修身教育素材として生き残ったことが明らかになった。

これに対し、第三章では明治20年代にドイツのヘルバルト派教育学と共に受容されたグリム童話に注目し分析を行った。この教育学はグリム童話を道徳教育素材として利用し、童話という〈虚構〉から伝記・歴史という〈実話〉へ繋ぐ配列を提示して教科書上で〈虚構〉—〈実話〉を連関させた。つまり、明治期日本は西洋の教育学から教授法・素材・教材配列等を受容しただけでなく、グリム童話を通して西洋近代国家ドイツの道徳教育イデオロギーをも受容した。これを受けてグリム童話は『修身童話』（明治31～34年）として出版されたが、国定修身教科書に残ることはなかった。その原因を樋口勘次郎と湯本武比古の注釈から考察した結果、原典となった『小学校教授の理論と実際』（ライン・ピッケル・シェラー著）に現れる西洋中産階級の道徳的規範〈労働〉〈家族〉〈宗教〉エートスが『修身童話』ではほとんど欠落していることが明らかになった。特に〈労働〉〈家族〉においてその傾向が強く、受容した日本側が西洋近代的エートスを十分に理解できなかったと思われる。その理由として、日本の中産階級がまだ形成されていなかった点、更に日本における新興中産階級の出自が旧士族層であったため、へ

ルバルト派教育学がグリム童話に付加した近代的中産階級の労働や核家族のエートスを受け入れにくかった点が挙げられるだろう。

第四章では、〈実話〉の核となったヘルバルト派教育学の人物主義に注目し、明治初期から国定前の修身教科書に掲載された「二宮金次郎」と「塩原多助」のエートス分析を行った。その結果、二宮金次郎が体現した〈労働〉は、家の再興を目標とする点、身内によって〈学問〉が否定されている点、農業及び家内労働と学業の両立が美德とされている点において特徴的であった。二宮の〈労働〉には〈小学校〉への就学率を上昇させ国力を高めなければならないという明治政府側の意図が窺える。前近代的な労働力＝子どもという認識を啓蒙する一方で、子どもの農作業や家内労働を称揚するという両面価値性が見られた。つまり、この矛盾から国家側の意図と国民の現実的状况とのズレが窺われ、修身教科書に表現された二宮の〈労働〉はこのズレを埋める役割を担っていたと考えられる。これに対し、「塩原多助」は下からの力によって修身教育素材に押し上げられ掲載されたことが分かった。その原典は三遊亭圓朝による講談伝記譚『鹽原多助一代記』で、ここでは前近代的な身分制度を下敷きに展開される〈義〉というエートスが強調されている。ところが、当時の劇評や新聞などでは塩原は近代的な経済家として評価され、成功の姿に〈立身出世〉が読み込まれていた。しかし、大衆の人気によって修身教科書に登場した塩原は、原作の年齢設定と異なる子どもに書き換えられ、〈模範的子ども像〉として掲載された。その上、二宮との意図的な連結によって塩原に無関係な道徳的解釈が付加されていることが明らかになった。原作の塩原が体現した〈立身出世〉と二宮の〈孝〉は本来的に対立するものを含んでおり、「教育勅語」を境に〈孝〉が優先されると、塩原は修身教育素材から脱け落ちていったと考えられる。「二宮金次郎」と「塩原多助」の比較により、前者が特に国家側の支持による子どもの模範像であったことが裏付けられ、国定修身教科書へと繋がる「二宮金次郎」の形成過程の一端が示された。

第五章では、明治初年以來、寓話・童話・昔話が占めていた〈虚構〉教材が国定から落ち、〈実話〉が〈模範人物〉として成立していく過程を考察した。その際、日本昔話の国定国語教科書への移行についても辿った。「五ヶ条ノ御誓文」（明治元年）で〈洋化〉による智識の吸収が提示され、〈小学校〉という国民教育の場で使用する修身教科書は翻訳書が中心になった。当時の日本昔話は〈勸善懲悪〉など前近代的エートスを含んでおり、〈洋化〉の流れに反する内容であった。しかし、外国人向けちりめん本や日本人向け英語教材として採用された「五大昔話」は、明治初期の洋学者たちの注意を引いた。その上、ヘルバルト派教育学の「国民童話」（＝グリム童話）の道徳教育利用という主張は、その後方向を転じ、日本昔話を「我が國固有ノ昔話」と位置付ける根拠となった。つまり、西洋の教育学が日本昔話を修身教育素材として浮上させる契機となり、洋学者たちの再評価を促すことになったと考えられる。これは『修身童話』が日本昔話とグリム童話を対照させて教えた点からも明らかである。「教育勅語」以降、国定教科

書に向けて修身教育イデオロギーが一定の方向へ硬直し始める。国定直前である明治30年代になると、ヘルバルト派教育学が連結させた修身教育素材における〈実話〉が、伝記を基にした〈模範人物〉を確立していったことは周知の通りである。これに対し〈虚構〉の修身教育素材である寓話・童話・昔話は虚偽であるという理由から〈假作物語〉に置き換えられたことが分かった。先述したように、日本昔話は洋学者らによって修身教育素材としての正当性が主張されたが、この置き換えにより、国定修身教科書では不採用になったと考えられる。また、国定前の日本昔話に現れたエトスは〈恩〉による〈孝〉の強調に終始し、〈労働〉は現れず、二宮との連結も見られなかった。この点を国定に残ったイソップ寓話と二宮の連関と合わせて考えれば、修身教育イデオロギーにとっては、「二宮金次郎」が体現した〈労働〉が最も重要なエトスであったことが分かる。国定以後の二宮も〈労働〉を称揚し続け、資本主義経済体制への移行によって崩壊に瀕した農村部における〈模範人物〉という役割を担い続けた。つまり二宮は、神島二郎（『近代日本の精神構造』）が言う「イデオロギー的なてこ入れ」装置として機能しており、このことは〈小学校〉に通う〈子ども〉の修身教科書テキストにも現れていたと言えるだろう。

以上のように、修身教育素材のエトス分析と二つの二項的概念基軸の連関を考察した結果、二つの特徴が明らかになった。一つは、二宮尊徳や日本昔話といった前代社会の素材を明治維新後の視点で取り込み変容させていった点、もう一つは、日本の修身教育の形成は西洋の素材や教育学の理論によって裏打ちされ、〈洋化〉による日本化の強化という動力が常に働いていたという点である。西洋の経済教科書に掲載されたイソップ寓話、ドイツの道德教育に利用されたグリム童話、外国人向けちりめん本や英語教材を通じた日本昔話の再評価、ヘルバルト派教育学に基づく〈模範人物〉の形成など、これら全ては〈洋化〉の智識吸収が動因となって生じた現象に他ならない。〈洋化〉—〈王政復古〉の二項対立では、国民教育を確立するという共通認識の下に議論がなされ、「教育勅語」を契機に儒教的〈王政復古〉が台頭したかに見えるが、その正当性を主張する際には洋学が引き合いに出された。故に、明治政府側の理解度や民衆の意識とのズレといった現実的な試行錯誤の揺れも、このイデオロギー的な二項対立に収束していったと思われる。第二章から第五章までの考察で示したように、このことは当然ながら国民教育の基礎である修身教科書のテキストにも反照された。その際、客観的には〈模範人物〉も伝記を基に作られた〈虚構〉性を含んでいるにもかかわらず、〈假作物語〉—〈実話〉という二項概念の確立によってその〈虚構〉性が無視され、〈模範人物〉は〈実話〉であるという観念が浸透したように見える。また、〈虚構〉—〈実話〉の二項対立が、二宮金次郎像を形作った修身教育イデオロギーにおいて極めて重要な意味をもつことも本考察で明らかになった。